「近代新宗教」のグローバル化への対応とグローバル化時代が生む新しい宗教運動
（パネル「グローバル化と日本宗教」発題）
井上順孝

 日本におけるグローバル化の進行が、宗教活動にどのような形であらわれているかについて、この
報告では２つの視点から論じたい。１つは「近代新宗教」におけるグローバル化への対応はいかなる
形で展開されているかという視点である。もう１つはグローバル化を形成時の社会的条件とすること
で、新しいタイプの宗教運動が出現しつつあるのではないか、という視点である。
近代新宗教は、従来新宗教として総称されてきた近代以降の新しい宗教運動のうち、次のような特
徴をもつものを包括する概念として用いる。すなわち近代以前から日本社会に定着していた日本の伝
統的な宗教との連続性が明確であり、近代社会の形成に対応する形で組織化がなされたような宗教運
動である。具体的には天理教、霊友会、創価学会、立正佼成会、世界救世教など、従来新宗教と称さ
れていたものの大半が含まれる。
他方、グローバル化の時代には、新しく形成される宗教において、教えの多様化が目立っている。
このうち、日本の伝統宗教との連続性が希薄となり、他の宗教における要素や宗教以外の要素が比較
的自在に取り入れられる傾向をハイパー化と称することにする。宗教運動のハイパー化は、日本のみ
ならず、多くの国において観察され、これまでカルト、ＮＲＭと総称されるものの一部に、その特徴
をみてとることができる。日本では、ＧＬＡ、幸福の科学、法の華三法行などに、教えのハイパー化
を観察できる。
グローバル化は近代新宗教の最近の展開に影響を及ぼすと同時に、グローバル化という新しい社会
状況そのものが、従来とは異なるタイプの新しい宗教運動の形成を促しつつあると考えられる。ハイ
パー化はその結果生じたものの１つであり、この他、サイバー化、バーチャル化といった現象も考慮
すべきである。
グローバル化は、人、モノ、情報が国境を軽々と越え、ボーダレス化していくという現実が複雑に
絡み合って展開している。とくに高度情報化とは深い関わりをもっている。そうすると、本来、同じ
価値観を共有することが存続の大前提となってきた宗教にとって、一面ではそれと反するようなベク
トルをもったグローバル化は、現代宗教にどのような作用をもたらしているのであろうか。近代新宗
教のいくつかは国外布教を積極的に行うようになっているが、そうした教団は日本にいる外国人に対
しても、布教を行うのが一般的である。これはしかし国際化への対応であって、それがそのままグロ
ーバル化への対応として捉えられるとは限らない。
また、教えにおけるハイパー化が顕著になる上では、情報化の影響がもっとも大きく作用すると考
えられる。ただ日本の新しいタイプの宗教運動の場合、組織形態にはグローバル化や情報化の影響は、
まださほど顕著にみてとれない。ただ国外から到来した新しい宗教運動には、無国籍化とみなせるよ
うな組織面での傾向もあらわれ始めている。そうした背景を考えてみたい。